



Title	国際共修を通した学生の学び：テキストマイニングを用いた自由記述による振り返りレポートの分析から
Author(s)	中橋, 真穂
Citation	大阪大学高等教育研究. 2025, 14, p. 45-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102851
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国際共修を通した学生の学び

—テキストマイニングを用いた自由記述による振り返りレポートの分析から—

中橋 真穂^{*1}

**Exploring Student Learning through International Collaborative Learning:
A Text Mining Analysis of Reflective Reports with Open-Ended Responses**

NAKAHASHI Maho^{*1}

本調査は、A大学で実施された国際共修科目において、異なる文化的背景を持つ学生が協働を通じてどのような学びを得たのかを、自由記述による最終レポートと参与観察のデータを用いて分析したものである。特に、テキストマイニングを活用し、学生の意識の傾向やキーワードの関係性を可視化することで、学びの特徴を明らかにした。分析の結果、学生たちは異文化間の価値観や伝え方の違いに直面しながらも、粘り強く関わることで多様性を理解し、相互尊重や柔軟なコミュニケーション能力を培っていた。また、こうした経験は、将来の国際的な環境での協働に活かせる実践的な力として位置づけられ、国際共修科目の教育的意義が再確認された。今後は、より多くの学生が平等に参加できる環境整備と、より効果的な授業設計の工夫が求められる。

キーワード：国際共修、協働、異文化理解、学び、テキストマイニング

This study analyzes how students from diverse cultural backgrounds learned through collaboration in an international collaborative learning course conducted at University A. The analysis draws on data from students' final reports, written in free-response format, as well as observations of participants. In particular, text mining techniques were employed to visualize trends in students' perceptions and the relationships between key terms, thereby revealing the characteristics of their learning experiences. The results show that, while students encountered differences in values and communication styles across cultures, they developed an understanding of diversity through persistent engagement. They also cultivated mutual respect and flexible communication skills. These experiences were positioned as practical competencies applicable to future international collaborative settings, reaffirming the educational significance of international collaborative learning courses. Going forward, it will be important to create environments where more students can participate equally and to develop more effective course designs.

Keywords : International Collaborative Learning, Collaboration, Intercultural Understanding, Learning, Text Mining

所 属：^{*1}大阪大学大学院工学研究科国際交流推進センター

Affiliation : ^{*1}Center for International Affairs, Graduate School of Engineering, The University of Osaka
連絡先 : nakahashi-m@fsao.eng.osaka-u.ac.jp (中橋 真穂)

1. はじめに

グローバル社会が進むなか、主体的に物事を考え、多様な価値観や文化背景を持つ他者の意見に耳を傾けながら自分の意見を相手に上手く伝え、協働することのできる人材が求められている。多様化が進む日本、そして世界を舞台に活躍できる、いわゆる「グローバル人材」の育成こそが今、日本の教育現場においても求められている能力の一つであろう。これらを受け、大学においても昨今、海外研修や国際交流の促進に加え、留学生と日本人学生が共に学ぶ国際共修が注目され、実施されている。末松（2019, p.2）は、国際共修とは、「言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流（meaningful interaction）を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を想像する学習体験」を指すとしている。そして、「単に同じ教室や活動場所で時間を共にするのではなく、意見交換、グループ・ワーク、プロジェクトなどの共同作業を通して、学習者が互いの物事へのアプローチ（考察・行動力）やコミュニケーションスタイルから学びあい、知的交流の意義を振り返るメタ認知活動を、視野の拡大、異文化理解力の向上、批判的思考力の習得、自己効力感の増大などの自己成長につなげる正課内外活動を国際共修とする」と定義している。講義名は、「国際共修」に限定されず、大学によっては「多文化交流科目」「国際交流科目」などの名称が使われている場合もある。

2. 先行研究

これまで多くの大学では、海外留学の促進により、グローバル人材の育成に力を入れてきた。短期語学研修、長期留学、研究留学、海外インターンシップなど期間や内容に関わらず、海外での経験はグローバル人材育成において重要であると指摘されている（例えば、渡部2009、宮本2012等）。一方で、経済的な理由や授業、企業インターンシップ、就職活動など時間的制約や語学力不足などの理由で実際に海外留学を実現する学生は限られているというのが現状である（岩城2012）。そこで、海外留学などの促進と並行し、より気軽に参加・利用することの出来る学内の国際交流機会の整備はグローバル人材育成において重要であり、特に2000年代以降、留学生の受け入れ増加と並行して、各大学では学内や国内での国際交流や異文化体験といった機会の提供も進められてきた（中橋2024）。しかし、佐藤他（2011）は、キャ

ンパスの国際化の必要性が唱えられて久しいが、留学生の受入数が増えている割には日本人学生と留学生の接触・交流の場が十分に設けられていない大学が少ないと指摘する。さらに、特に学生が専門教育課程に進む前の一般教養教育の段階である共通教育課程において、その傾向は著しいとした。また、少し前のデータにはなるが、東北大学学生生活実態調査（2008）では、東北大学の専門課程進学前の学生においては、外国人留学生との接触・交流の機会が必ずしも多くないことが報告されている。学部生は大学院生に比べて留学生と関わる機会が少なく、「授業内で交流」した経験を持つ学部生は全体の27.5%にとどまり、「友人として交流」したことのある学部生も17%に過ぎないとしている。一方、今後「授業内で交流してみたい」学生は21.3%、「友人として交流してみたい」学生は45.8%に上っている。さらに、東北大学で2016年に留学生を対象に実施した生活調査でも、同国出身の友人の数に比べ、学内・学外とも日本人の友人の数が少なく、学内で「日本人の親しい友人が全くいない」と答えた留学生は23.1%、学外は43.3%であった（東北大学2017）。水松（2017）は、国際共修など国内学生と国際学生が共に学ぶ場を設けたとしても、「意図的に」適切な環境作りがなされなければ、そこから期待される効果は十分に引き出せないとしている。これらの結果から、例えば日本人学生、外国人留学生が講義を受講し、定期的に関わり、交流し、授業内容によっては共にプロジェクトを遂行するなどを通して共に学び合う機会は益々重要であるといえよう。これらを背景に、国際共修科目の提供は年々増加しており、例えば高橋（2019）は、日本の国公立大学の7割近くが国際共修科目を開講しているとしている。それに伴い、国際共修に関わる研究や実践報告も増加の一途を辿っている。

高松（2024）は、日本の国立大学で提供される国際共修授業数を、2019年から2023年にかけて、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けつつどのように変化したかを調査した。結果、新型コロナウイルス感染症拡大で留学生の移動が制限されるなか、授業はオンライン化するなど、授業の進め方などで様々な課題に直面したものの、全国の国際共修科目の提供数や先行研究動向といった点で減少や縮小といった大きな変化は見られなかったと結論づけた。それどころかむしろ、それまで協定校等の学生交流のネットワークは国外が中心だったが、コロナを契機として国内の大学ともネットワークが広がり、コロナ前に比べ、オンラインを活用してより多様なバックグラウンドの学生が1つのクラスに集うこと

が実現したとしている。同調査において、2023年4月～7月の国際共修科目的提供数は、国立大学の中で東北大學が最も多くの国際共修科目を提供しており、次いで北海道大学、大阪大学と続いていると報告している。

今後、日本においても多様化、グローバル化が益々進むことが予想されるなか、海外留学などを通してだけではなく、日本国内においても、異なるバックグラウンドを持つ人々と共に問題解決に挑むことのできる力を育む機会、例えば大学においては、このような環境を体验できる授業の重要度は増す一方であろう。

以上のように、国際共修に関わる調査、研究が進められてきた。ただし、その多くが実践例の報告に留まり、効果や課題について十分に検証された研究の蓄積は十分とは言えない。また、こういった授業における学習効果や課題、それらから考えられる効果的な授業カリキュラムや運営方法に関する考察は未だ発展途上にある。今後、より効果的な国際共修科目が展開されるためには、成果の検証や効果的な授業内容の考察が必要となってくるだろう。

本稿は、A大学において開講された、ある「国際共修」クラスに参加した留学生及び日本人学生を対象に実施した最終課題レポートを分析し、受講者がどのような学びを得たのかを考察する。そしてそこから、国際共修をより効果的に実施するための示唆及び今後の課題について考察する。

3. 授業の概要と受講者

本節では、今回調査を実施した2024年度に開講した国際共修科目の授業の概要を示す。授業の目的と概要として、日本文化、異文化、グローバリゼーションに関連する基礎的な概念と問題を取り上げること、異文化に関する理論と実践を学び、理解することを通して、グローバル社会で活躍するための基礎的な異文化適応能力を養うこととする明記した。また、日本文化、異文化、グローバル化について学び議論することで、文化の違いやグローバルな問題をより広い視野で理解する能力を養うことができることを学習目標に設定した。さらに履修・受講条件に、学生はトピックに関するディスカッションやグループワークに積極的に参加することが奨励されること、コースを通じて自分自身の経験をクラスメートと共有し、毎授業ごとにリフレクションノートで感じたことや意見を確認すること、最終プレゼンテーションに向けて授業外でグループワークや発表準備に積

極的に参加することを明記した。また、使用言語は基本的に英語とした。1セメスター15回の授業のうち、各回のテーマは、異文化やグローバリゼーションなどに関わる基本的な概念から、学生が自分のこと、身近なこととして捉えられるようなディスカッションを設け、異なるバックグラウンドを持った学生同士が小グループを作り、取り組む機会を多く設けた。初回の授業からアイスブレークを実施し、出来るだけ発言しやすい雰囲気、環境を整えた。また、英語が苦手な日本人学生にも発言しやすいよう、すぐにディスカッションに移るのではなく、例えば予め自分の意見を書き出す時間や絵や図で示す時間を設け、それを使ってディスカッションを進めるようにした。そうすることで、視覚情報なども使いながら、日本人学生はより安心して積極的にディスカッションに参加できていた様子が観察された。

受講者は日本人学生3名、外国人留学生21名の計24名が受講した。日本人学生の3名のうち1名は、単位は不要だが留学生と英語で交流をしたいという動機を持ち、履修登録をせずに出席していた。また、上記の3名以外にも、入れ替わり日本人学生が数名参加し、ディスカッション等に参加した。これらの学生は、前年度の夏に実施した短期海外研修の参加者で、帰国後も英語や外国人留学生と何等かの繋がりを持ちたいといった動機で参加していた。授業での使用言語が英語ということもあり、例年、外国人留学生が圧倒的に多い傾向にある。しかし、参加している留学生から毎年、「日本人学生と交流がしたい」といった声が多く上がることもあり、本授業では、単位は不要で履修登録をせよとも参加したい日本人学生の参加も奨励している。なお、受講学生の専攻や外国人留学生の国籍については個人の特定を避けるため本稿では記載しないが、専攻、国籍、学年は非常に多様である。

4. 研究方法

本調査では、上記に示した授業における受講者の意識を探るために授業の課題として提出を課した最終レポート及び全15回分の授業での参与観察から得たデータを照合する形で複眼的に分析・考察した。特に、最終レポートは、学生が授業でどういった学びを得たのかについて考察・分析する際に用い、実際の授業内でどのように経験したのかを参与観察で確認することとした。調査については授業中に口頭及び紙面上で説明をし、個人が特定されない範囲で記述内容を引用すること、調査への協力

は成績評価に一切影響しないことを伝えたうえで、調査協力に同意した21名のデータを分析対象とした。受講者の記述内容を元に意識や行動について分析し、参与観察の際に記述したフィールドノートについては、振返りレポート分析の際に使用した。

最終レポートの記述項目は、表1に示した3つである。これらを、字数制限は設けず、英語又は日本語で記述してもらった。

これらの記述文データをもとに、ユーザーローカルテキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) による分析を通じ、学生が授業を通して得たことや意識について、可視化、定量化を試みた。

船橋（2022）によると、アンケート調査などをもとに数値化されたデータを統計的に分析する方法を量的分析、インタビューなどに見られる記述をもとにその要因や背景を探っていくのが質的分析であるが、テキストマイニングはインタビューのような発言記録を文字起こしし、得られた質的なデータを細分化して数値化して、量的分析の対象とできる点に利点があるとしている。他方、得られた分析結果からわかったことを解釈したり説明したりする際には再度質的データに戻って考察するプロセスを考えると、当該側面については質的分析の対象とも言えるとも指摘する。そして、テキストマイニングから導出されたワードクラウド、共起ネットワークの特徴を次の通りとした。（1）ワードクラウドは、話の全体像を俯瞰することが目的である。文字の大きさはインタビュー者が意識を向けている証拠となる。しかし、動詞、普段の言葉遣い（方言などを含む）、日常では使用頻度が低いという理由で、強調されていることもあるため、これらの特徴を考慮して分析を行わなければならない。（2）共起ネットワークとは、単語と単語を結んでいく線の太さに注目することで、同じ文脈の中に関連づけられているかどうかがわかる。

5. 調査結果

質問項目ごとに、テキストマイニングの結果を「ワードクラウド」「共起キーワード」「自由記述」の順に提示し、調査協力者のコメントを引用しながら、考察する。

5.1 異なる文化的背景を持つ学生と協働から学んだこと

はじめに、質問項目1（表1）に対する自由記述的回答を次の3つの結果から考察する。

5.1.1 ワードクラウド

ワードクラウドは、スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさでWordが表示される。先述の質問項目1の自由記述回答から出現頻度の高い単語を抽出し、その頻度に応じた大きさで表したもののが図1である。「異なる」が最も大きく、自由記述では「異なるバックグラウンド」「異なる文化」といった内容で使用されていた。その他にも「さまざま」「多様性」「文化」「文化的」など、多様なクラスメンバーとの違いを意識しつつ、「協働」「議論」「考え方」「視点」などの単語も大きく提示されていることから、協働作業を進めていった様子が確認された。また、「注意深い」「忍耐強い」などの単語も出現頻度が高く、注意深く、時には忍耐強く関わり合いながら、活動が進められていることが分かる。

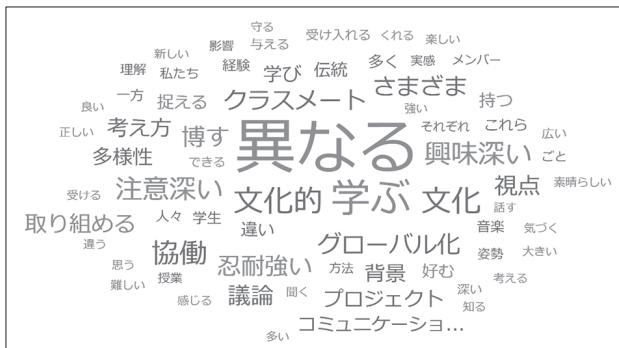


図1 質問項目1 ワードクラウド

表1 最終レポートの記述項目

1	What did you learn from collaborating (e.g., through discussions or preparing presentations) with students from different cultural backgrounds? 和訳：異なる文化的背景を持つ学生と協働（例えば、ディスカッションやプレゼンテーションの準備など）する中で、あなたは何を学びましたか？
2	What challenges or difficulties did you face when collaborating with students from different cultural backgrounds? 和訳：異なる文化的背景を持つ学生と協働する中で、どのような課題や困難がありましたか？
3	Through this course, what insights or lessons have you gained that you can apply in the future? 和訳：この授業を通じて、将来に活かせるような気づきや学びは何でしたか？

5.1.2 共起キーワード

次に、図2に共起キーワードを示す。共起キーワードは、文章中に出現する共起性の高い単語を線で結んだ図で、出現頻度が高い語ほど円が大きく、共起の程度が強いほど太い線で描写される。

「注意深い、聞く」、「コミュニケーション、気づく」などが共起していることから、注意深く聞き、コミュニケーションを通して気づきを得ていること、「異なる、背景、文化的、学生、協働」から、異なる背景、文化を持つ学生との協働、そしてそれらを通して「多様性、実感」が生まれていると分析する。

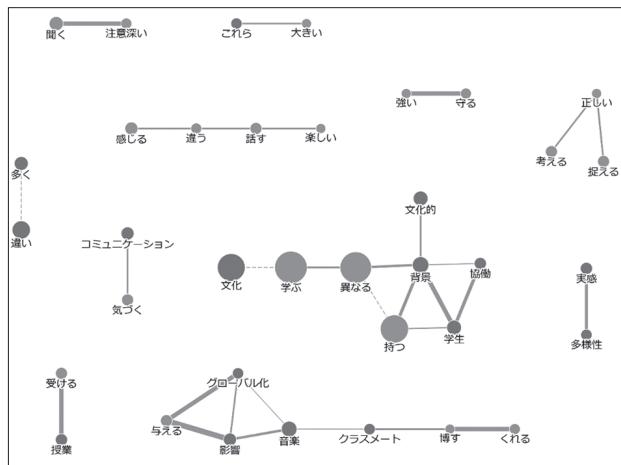


図2 質問項目1 共起キーワード

5.1.3 学生の自由記述（抜粋）

質問項目1に対する自由記述を一部抜粋し、実際にどのような内容が述べられたのかを提示する。

各国の独自性や違いをより広い視野で理解できるようになりました。また、コミュニケーションスキルも向上し、相手の話を注意深く聞き、感謝の気持ちを持って積極的に話すことを学びました。

私にとって、この経験は新鮮であり、非常に興味深いものでした。なぜなら、異なる背景を持つ人々は、それぞれ全く異なる視点や考え方を持っているからです。これらの議論を通じて、国ごとの文化の違いがいかに大きいかを実感しました。

協働作業を円滑に進めるためには、お互いを理解することが重要だと学びました。私は、学

び方や働き方にここまで違いがあるとは思っていませんでした。そのため、最初はお互いの考え方を理解し、タスクを整理するのが難しかったです。しかし、全員が相手に合わせる努力をしたことで、少しづつ適応できるようになりました。そして、多くの会話や議論を重ねるうちに、違いを受け入れ、それを乗り越える方法を見つけることができました。

注意深く聞くことの重要性を学びました。忍耐強く、オープンな姿勢を持つことが必要でした。また、自分の考えを明確に説明するスキルも向上しました。異なる背景を持つ学生と協働することで、より良いコミュニケーター、リスナー、問題解決者になれたと感じています。多様性が学びをより豊かで有意義なものにすることを実感しました。

この経験を通じて、自分の興味を見直し、多様性を受け入れることの大切さを学び、世界は自分が思っていた以上に繋がっていることを実感しました。

あるチームメンバーは直接的な議論や討論を好む一方で、別のメンバーは合意形成を重視する傾向がありました。この経験を通じて、自分のコミュニケーションの方法を調整し、全員の意見が尊重されるように工夫することの大切さを学びました。

以上から、ワードクラウド、共起キーワードでも確認されたように、異なる文化背景を持つクラスメートとの協働を通して、様々な気づきや学びが得られたことが具体的な内容から確認された。異なる文化的背景を持つ学生との協働を通じて、学生たちは多様性が学びを豊かにし、自身の視野を広げるものであることを実感している。議論やプレゼンテーション準備などの活動では、価値観や思考様式、コミュニケーションの取り方に違いがあることを体験的に理解し、それに適応するための努力が求められた。特に、相手の話を注意深く聞く姿勢、忍耐と柔軟性、そして自由記述で繰り返し述べられている、自らの意見を明確に伝えるスキルが、協働を成功させる鍵であると認識された。また、異なる意見やアプローチを調整しながら合意を形成する過程を通じて、多

文化的な協働におけるコミュニケーションの調整力や共感力が養われた。これらの経験は、国際的な場における人間関係構築や問題解決能力の基盤となるものであり、学生にとって実践的かつ意義深い学びであったといえる。

5.2 異なる文化的背景を持つ学生との協働における課題
や困難

次に、質問項目2（表1）に対する自由記述的回答を次の3つの結果から考察する。

5.2.1 ワードクラウド

先述の質問項目2の自由記述回答から出現頻度の高い単語を抽出し、その頻度に応じた大きさで表したものが図3である。質問項目1同様に、「異なる」が最も大きく、特に自由記述では「異なる文化」が頻繁に確認された。また、「忍耐強い」が同様に最も大きいことから、協働する中での課題や困難に直面した際、「忍耐強さ」が必要であったことが想像できる。

「文化」「協働」「ディスカッション」「コミュニケーション」なども頻度が高く、グループでファイナルプレゼンテーションに向けて取り組む機会も多かったことから、「プレゼンテーション」の準備を通して、これらの単語が意識された様子が確認された。更に、質問項目1では出現のなかった「言語」が大きく提示されている。自由記述を確認すると、ディスカッションなどの際に言語の壁でもどかしい思いをした学生や、言語の壁を乗り越えるために「忍耐強く」「英語」で「話し合う」「伝えれる」として「乗り越える」といった過程が明らかとなつた。

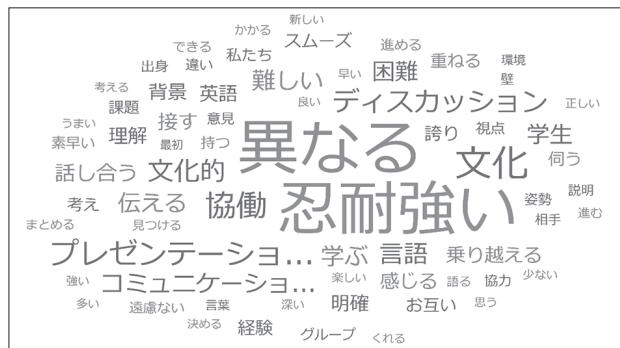


図3 質問項目2 ワードクラウド

5.2.2 共起キーワード

次に、共起キーワードを図4に示す。図3ワードクラウドでも明らかになったように、「言語、課題、壁」が

共起していることから、言語が壁、課題となっているると推測する。これに対し、後述する自由記述から考察すると、これらの壁を乗り越えるために、その他の共起キーワード、「忍耐強い、接す、うまい、進める」、「考え、明確、伝える」ことで、「乗り越える、できる」につながっていると捉えることができよう。

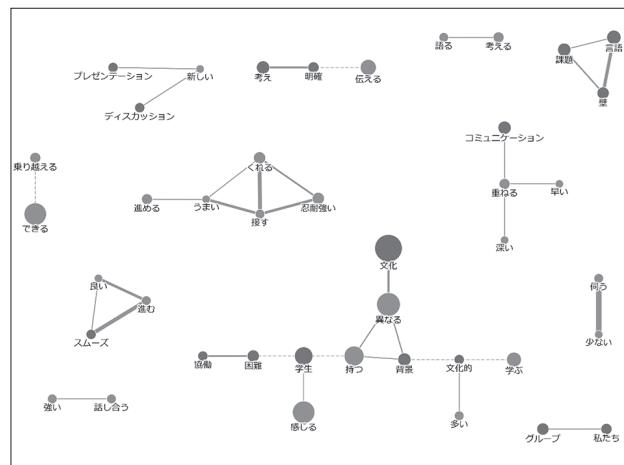


図4 質問項目2 共起キーワード

5.2.3 学生の自由記述（抜粋）

質問項目2に対する自由記述を一部抜粋し、実際にどのような内容が述べられたのかを提示する。

私にとって最大の課題は英語でのコミュニケーションでした。(中略)しかし、クラスメートはとても親切で忍耐強く接してくれたので、最終的にはうまく議論を進めることができました。

学生たちとのディスカッションでは特に困難を感じませんでした。彼らは異なる文化を尊重しようとしていたので、スムーズに進み、全体的に良い結果につながったと思います。

異なる文化を尊重することが、現代のグローバル化した社会において非常に重要であると学びました。

言語の壁によって、考えを明確に伝えることや、相手の意図を完全に理解するのが難しい場面がありました。そのため、忍耐強く、異なる方法で説明したり、視覚的な例を使ったりする必要がありました。(中略)しかし、全体として、

より理解力があり、柔軟で、尊重する姿勢を身につけることができました。異なる背景を持つ人々と協力することで、違いが強みになり得ることを学びました。

自分の文化について、できるだけ客観的に説明しようとすることが一番難しかったと思います。

異文化コミュニケーションでは、単に文化を共有することだけでなく、お互いの背景や言葉の理解の違いを考慮することも重要だと感じました。

一つだけ難しかったのは、人々の意見の伝え方の違いでした。

私の文化では、相手の気持ちを傷つけないようにとても丁寧な言葉を選びます。しかし、他の文化では遠慮なく率直に意見を言うことが普通であり、時には失礼に感じることもありました。ですが、これは文化の違いであり、自分の視点ではなく、相手の文化的視点から理解することが大切だと学びました。

言葉が完璧でなくても、ボディランゲージや声のトーン、そして忍耐があれば、相互理解は可能です。コミュニケーションを重ねるほど、お互いの視点をより深く理解できるようになります。文化や言語への興味がさらに高まりました!!

自分自身に対してより忍耐強くなることも学びました。そして何より、効果的なコミュニケーションとは単に流暢さではなく、相手の話を聞こうとする姿勢や、お互いを支え合うこと、学び合おうとする前向きな気持ちが大切なだと実感しました。

以上のように、先に述べた「言葉の壁」以外にも、「伝え方の違い」に難しさを感じているといった記述がいくつか見られた。伝え方については、例えば、ハイコンテクスト文化 (High-context) とローコンテクスト文化 (Low-context) に分類することができる。ハイコンテ

クスト文化の特徴は、話し手は多くを言葉にせず、文脈や非言語的なヒントに依存し、聞き手が背景知識を共有していることを前提とし、暗示的で、行間を読む必要がある。対して、ローコンテクスト文化は、聞き手が前提意識を持っていないかもしれないという意識のもと、明確で直接的な表現が好まれ、はっきりと、率直に伝える必要がある。これらの伝え方については、例年、誤解が生まれる要因の一つであり、協働を通して大きな気づきを得ているようである。

5.3 授業を通して、今後に活かせそうな学び

次に、質問項目3（表1）に対する自由記述的回答を次の3つの結果から考察する。

5.3.1 ワードクラウド

先述の質問項目3の自由記述回答から出現頻度の高い単語を抽出し、その頻度に応じた大きさで表したもののが図5である。

質問項目1、2同様に、「異なる」「文化」などが最も出現頻度が高く、次いで「文化の違い」「文化的」「異文化」「グローバル化」などを「学ぶ」といったワードが確認された。また、「適応」「尊重」「役立つ」「活かす」などのワードも比較的頻出度が高いことから、これらのテーマについて授業を通して将来に活かせると意識していると考察する。

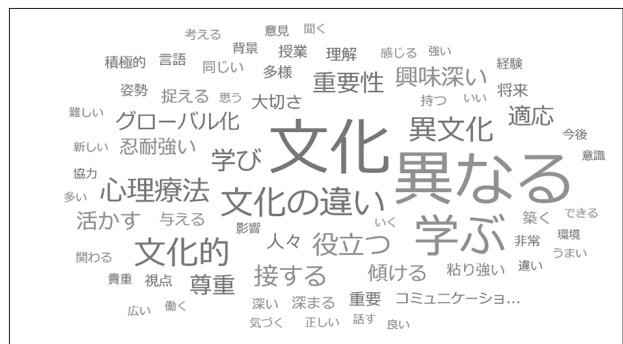


図5 質問項目3 ワードクラウド

5.3.2 共起キーワード

次に、共起キーワードを図6に示す。「意見、聴く、尊重」や「背景、異なる、人々、協力」などがそれぞれ共起していることから、異なる背景を持つ人々と協力し、意見を聞き、尊重する姿勢の大切さが述べられていることが分かる。また、「積極的」に「関わる」こと、「忍耐強い、良い、築く」も強く共起しており、そこから「コミュニケーション」に共起していることから、忍耐強く

コミュニケーションを取ることを通して良い関係を築くといった気づきにつながっていることが考察される。

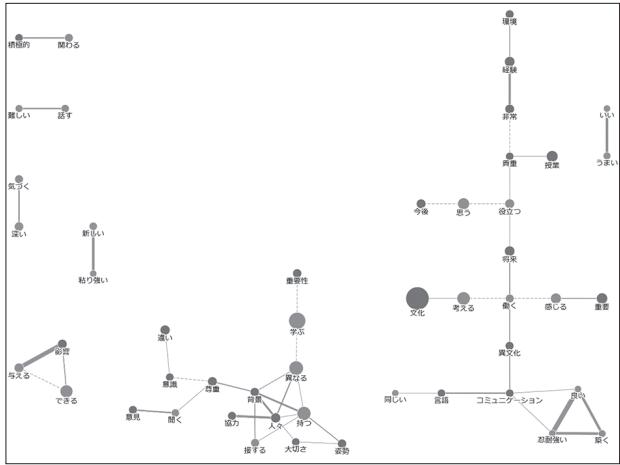


図6 質問項目3 共起キーワード

5.3.3 学生の自由記述（抜粋）

最後に、質問項目3に対する自由記述を一部抜粋し、実際にどのような内容が述べられたのかを提示する。

他の文化をより意識的に尊重し、理解できるようになると考えています。

普段使わない言語で自分の考えを表現するスキルを身につけることができました。また、他者に適応し、異なる価値観を理解する力も養われました。時には、お互いに意図が伝わらない状況もありましたが、その都度工夫して意思疎通を図ることができました。

このような経験は、将来、国際的な環境で働く際に非常に重要だと感じます。私は将来的に海外で働きたいと考えているので、異文化の人々と協力しながら仕事を進めるスキルを身につけられたことは大きな収穫でした。

異なる文化を尊重することが、現代のグローバル化した社会において非常に重要であると学びました。

積極的に耳を傾けることの重要性も学びました。

粘り強さと新しい課題に適応することの重要性

性を学びました。最初は難しいと感じた概念も、深く関わることで、段階的にアプローチすることができたと気づきました。

文化の違いは障害ではなく、理解しようとすれば乗り越えられるものだと学びました。

他者の意見を理解し、全員の視点を調整して
チームとして協力する方法を学びました。

特に重要な教訓の一つは、多様な背景を持つ人々と関わる際のオープンマインドな姿勢の大切さです。明確で忍耐強いコミュニケーションは、誤解を防ぎ、より良い人間関係を築く助けになります。将来、特に国際的な環境でチームワークをする際に、この経験が役立つと確信しています。

異文化間のコミュニケーションを成功させるには、単なる言語スキルだけでなく、忍耐、敬意、異なる視点を理解しようとする意欲が不可欠であることを学びました。

学部の特性上、今まで教授の話を聞くだけの講義ばかり受けていたので、留学生たちとのディスカッションを通して自分の意見を表現することの大切さを学びました。自分の意見をメンバーに話したり、またそれを英語で最後まで言い切ることが自分にとって難しかったです。反対に、留学生の方達はそういったことが上手な人が多いと感じました。彼らの姿勢から学んだことを今後に活かしたいです。

以上から、授業を通じて、学生たちは異なる文化や価値観に対する理解と尊重の重要性を認識するようになったことが分かる。特に、異なる文化的背景を持つ他者との対話や協働を通じて、文化の違いは乗り越え可能なものであり、相互理解の姿勢や工夫によって円滑なコミュニケーションが可能になるという気づきが得られている。また、自らの考えを言語化して伝える力や、他者の意見に耳を傾ける姿勢の必要性も実感しており、こうした経験を通じて、粘り強く課題に取り組みながら理解を深める姿勢が養われたと考察する。これらの学びは、将来、国際的・多文化的な環境で他者と協働する際に活用できる実践的な力として位置づけることができるであろう。

6. まとめと考察

本調査では、ある国際共修科目に参加した学生の自由記述による最終課題（振り返りレポート）をテキストマイニングによって分析し、異なる文化的背景を持つ学生との協働が、どのような学びや気づきをもたらしたのかを明らかにした。分析の結果、学生たちは異文化間の相違を「障壁」としてではなく「学びの資源」として受け止め、積極的に理解しようとする姿勢を育んでいたことが示された。

まず、学生たちは協働の中で、多様な価値観や考え方、コミュニケーションスタイルの違いに直面し、それを乗り越えるために忍耐強さや柔軟性、そして相互尊重の姿勢を持つことの重要性への気づきが明らかになった。とりわけ、協働作業を進めるうえで英語を共通言語とするなかで言語的困難を経験した学生が多く、ジェスチャーや視覚的補助、伝え方の工夫などを通じて、互いの理解を深めようとする試みが多数見られた。また、相手の話に耳を傾ける姿勢や、自らの意見を明確に伝えるスキルの向上が報告されており、時には忍耐強く取り組みながら、実践的なコミュニケーション能力の涵養が図られていた。

加えて、文化的背景による伝え方の違い—すなわち、ハイコンテクスト文化とローコンテクスト文化の差異—が、協働の中での誤解や困難の一因となっていたが、学生たちはこの違いを通じて「他者を自分の文脈で判断しない」ことの重要性に気づき、視野を広げる契機としていた。学生たちは単なる異文化理解にとどまらず、自身の思考や態度を相対化し、多様なメンバーとの共同作業を通して自己成長の可能性を見出していた。

さらに、学生たちはこの学びを将来の進路やキャリアに結びつけ、国際的・多文化的な環境において必要とされる力、例えば異文化適応力、協働力、相互理解力を実践的に体験できたことに高い価値を見出していた。これは、国際共修科目が単なる語学学習や異文化紹介にとどまらず、「意味ある交流（meaningful interaction）」を通じた深い学びの場として機能していることを示唆している。

今後の課題としては、使用言語が英語である国際共修科目において日本人学生の参加数が相対的に少ない点や、学習者間の言語力や文化の差によるコミュニケーション機会の偏りといった構造的な問題への対応が求められる。多様な学生がより対等に参加できる授業内容や、文化的背景の違いに基づく気づきを学びへと転化す

るための仕掛け作りが、より一層重要になるであろう。

以上のことから、国際共修科目は、学生にとって多様な環境を体感しながら、他者理解と自己変容の両方を促進する貴重な学びの場であり、グローバル人材育成の基盤として今後、益々その意義が高まることが予想される。

そして同時に、これらに関わる調査・研究が進められ、よりよいカリキュラムや授業方法に関わる議論の益々の発展により、効果的な国際共修科目がより多くの大学で実践されることが期待される。

受付 2025.4.14／受理 2025.7.25

参考文献

- 岩城奈巳（2012）「留学推進の取り組みが交換留学に与える影響についての実態調査」『名古屋大学留学生センター紀要』第10号, pp.23-29.
- 佐藤勢紀子・末松和子・曾根原理・桐原健真・上原聰・福島悦子・虫明美喜・押谷祐子（2011）「共通教育課程における『国際共修ゼミ』の開設：留学生クラスとの合同による多文化理解教育の試み」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第6号, pp.143-156.
- 末松和子（2019）「国際共修の検証—文献リサーチを通して見えてくるものー」『留学交流』第95号（2月号）, pp.1-12.
- 末松和子・秋庭裕子・米澤由香子（2019）『国際共修：文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂.
- 水松巳奈（2017）「プロジェクト型『国際共修』が学生の自己効力に与える影響—Kolbの経験学習モデルを用いてデザインした授業に関する一考察」『東北大学 高度教養教育・学生支援機構 紀要』第3号, pp.115-129.
- 高橋美能（2019）「国際共修授業の普及と多様なバックグラウンドの学生同士の多文化共生」ウェブマガジン『留学交流』Vol.100.
- 高松美能（2024）「国立大学における国際共修授業の実施状況と先行研究の動向－東北大学の取り組み－」『東北大学高等教養教育・学生支援機構紀要』第10号, p.137-146.
- 東北大学（2008）『東北大学生の生活：平成19年度〈東北大学生生活実態調査〉のまとめ』東北大学学生生活実態調査委員会編 https://www.tohoku.ac.jp/japanese/20180419_Stu_Japanese.pdf (参照日：2025年4月1日)
- 東北大学（2017）「2016年度東北大学留学生学生生活調査まとめ」東北大学グローバルラーニングセンター. http://www.insc.tohoku.ac.jp/japanese/wp-content/uploads/2017/10/J_International_Students_Survey_-2016.pdf (参照日：2025年4月1日)
- 中橋真穂（2024）「なぜ学内の国際交流機会に参加しないのか：理系学生を対象にしたPAC分析から」『大阪大学高等教育研究』第12号, p.59-66.

舟橋美佑（2022）「テキスト・マイニングを活用したインタビュー調査の量的・質的分析」『大阪大谷大学 STEAM Lab 紀要』第2号, p.81-84.

渡部留美（2009）「短期海外研修のプログラム作りと課題—大阪大学グローニンゲン大学短期訪問プログラム実施報告—」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第13号, pp.75-82.

宮本美能（2012）「超短期プログラムのボテンシャル：A大学におけるオーストラリア語学研修プログラムの一事例考察」『留学生交流・指導研究』第15号, pp.77-87.